

日本語学の観点からみた記録語辞典

——峰岸明著『平安時代記録語集成』の可能性——

後 藤 英 次

一 はじめに

本稿でいう記録語辞典とは、古記録（日記）資料の用語辞

典・用語集のことである。古文書の用語辞典・用語集と一体のものとして編纂されることが多いが、これは両者の語彙上・文体上の近さによるものである。『記録語』をどのように定義するかによって、採録語の範囲は自ずと変わってくるものと考えられるが、この点については、後で若干触れることとし、当面は記録類に特有の語（記録特有語）といった程度の意味で使っておきたい。

の初期においては主に日本史学の分野で進められた。これは、主に資料読解上の必要に迫られてのことと思われる。辞典や用語集の編纂を企図したものとしては、たとえば以下の如きものが挙げられる。

・ 布施秀治（一九三二）『古文書記録辞典 ア部』私家版

・ 藤原照等（一九五〇）『記録古文書語彙抄 一』ア部』私家版

・ ——（一九五一）『記録古文書語彙抄 二』サ部』私家版

私家版

・ 伊地知鐵男（一九六九）『古記録用語特殊解（案）』日

本古文書学提要 下』新生社

布施 藤原のものは未完で、伊地知のものも取り上げられて

いる語はそれほど多いわけではなく、いずれも本格的な辞典へ進む前の企画段階のもので、ともいうべきものである。その後、現在に至るまで、資料読解のための用語集・辞典類の作成は行われてきている。個別の文献を対象としたものには、以下のものなどがある。

- ・ 貴志正造（一九七九）『吾妻鏡用語注解』全訳吾妻鏡 別巻 新人物往来社
- ・ 今川文雄（一九七九）『明月記・要語解説』訓読明月記 第六巻 河出書房新社

・ 関幸彦・松吉大樹（二〇〇八）『用語・事項解説 用語 関幸彦・野口実 吾妻鏡必携』吉川弘文館

なお、先に掲げた布施と藤原のものは、書名に「古文書記録」「記録古文書」と「記録」と「古文書」とを並べているが、先述したように記録と関連するものとしては文書があり、古文書類の用語集・用語辞典も日本史学の分野では作成されてきている。最近のものまで含めて、いくつか掲げておく（近世文書を専らの対象とするものは除き、古代・中世のものも対象とするものの中から掲げておく）。

・ 荒居英次他（一九八〇）『古文書用字用語大辞典』柏書

房

（一九八三）『古文書用語辞典』柏書房（右の縮刷普及版）

・ 阿部猛（一九九七）『荘園史用語辞典』東京堂出版

・ （二〇〇五）『古文書古記録語辞典』東京堂出版

・ ことばの中世史研究会（二〇〇七）『鎌倉遺文』にみる

中世のことば辞典 東京堂出版

また、図書館学（司書）の立場からのものもある。

・ 矢島玄亮（一九七七）『古文書語彙稿』図書館学研究報

告 一〇

ここまで挙げてきたものはいずれも、日本語学の立場から見ると、興味・関心のありかが異なるためか、採録語の範囲や語義の説明、用例の挙げ方にやや問題が感じられる部分がある。採録語については、おおむね「文学作品その他一般の文献にはあまり見なれない、特殊・難解な用字・用語」といったあたりが基準になっているように思われる。各項目（立項された語）を見ると、用例を掲げず、語義説明のみを示すものが多い。さらに、語の読み方の根拠が示されているものは多くはなく、また、品詞やいつ頃から使われている語なのか

等が掴みたいことも少なくない。言語研究には、積極的に活用しづらいつのが正直なところであろう。

こうした状況の下、ごく最近、左記の書の刊行をみた。

・峰岸明(二〇一六)『平安時代記録語集成 上・下 附

記録語解義 吉川弘文館

この書は、日本語学分野における記録語研究の第一人者であった峰岸明博士の手になるものであり、これまでの記録用語集・記録語辞典とは一線を画するものと思われる。そこで、本稿では、この峰岸(二〇一六)について、日本語研究のためのツールとしていかなる特徴を持つものなのか、若干の検討を加えてみることにしたい。

二 記録語と国語辞典

—— 齋木一馬の研究から ——

ここで、記録語をもつばらの対象とする辞典・用語集を離れて、いったん一般の国語辞典における記録語の採録状況やその不備等について言及しておきたい。なぜなら、一般の国語辞典の記録語採録状況等に不足・不備があるからこそ、そ

れを補うものとして、記録語辞典・記録用語集が作成されてきた経緯があるからである。

用語集や辞典の体裁をとっていないため、先には触れなかったが、日本史学の立場からの記録語研究ということであれば、齋木一馬による一連のものを挙げないわけにはいかないだろう。²⁾ 以下に発表順に掲げておく。

・齋木一馬(一九五四)『国語史料としての古記録の研究 —— 記録語の例解 ——』『國學院雜誌』第五五巻第二号

・——(一九六八)『国語資料としての古記録の研究 —— 近世初期記録語の例解 ——』『仏教史研究』第三号

・——(一九七〇)『記録語の例解 —— 国語辞典未採録の用字・用語 ——』『高橋隆三先生喜寿記念論集 古記録の研究』統群書類従完成会

・——(一九七四)『漢籍を出典とする記録語若干について』『森克己博士古稀記念 史学論集 対外関係と政治文化 第二 政治文化・古代中世編』吉川弘文館

・——(一九七九)『記録語と国語辞書』『國學院雜誌』第八〇巻第一号

これらは、その後、齋木(一九八九)『古記録の研究 上

齋木一馬著作集1』吉川弘文館に収録された。また、齋木（一九九〇）『古記録学概論』吉川弘文館所載の「記録語要解」は、「編集後記」によれば、この一連の研究をもとに「用例を最小限に限定して収載したもの」とのことである。

齋木は、これらの中で、くりかえし記録語研究の遅れと、国語辞典・字典における記録語の扱い方の不備・未採録とを指摘している。たとえば、齋木（一九七九）の第一節のタイトルは「従来の国語辞書における記録語の欠落」であり、その末尾には「要するに記録・文書を読む者の立場からいえば、従来の国語辞書は、甚だしく不備であった」とある。なお、第二節以下のタイトルは以下の通りである。「二 『日本国語大辞典』の記録語収録」「三 『日本国語大辞典』に採録漏れの記録語」「四 記録・文書における特殊な用字・用語と漢和辞書」「五 記録・文書における特殊な用字・用語と国語辞書」「六 国語辞書・漢和辞書間のギャップ」「七 国語辞書への要望——漢字索引のこと——」。『日本国語大辞典』（初版）に多くの記録語が収録されたことを評価するとともに、採録に漏れた語も多いこと等を指摘し、さらに漢字索引が添えられるべきである旨の要望を述べている。

齋木の提言や記録語研究の進展もあり、記録語類は国語辞典にかなり採録されるようになってきてはいるが、いまだ十分とは言いがたい状況にある。記録語についての調査・研究のさらなる進展が俟たれるところである。

右に見た齋木の研究は、日本語学の研究にも抛り所のひとつとして利用されてきており、ある特定の文献における記録語の使用状況を調査する際の足がかりにされることも多い。次のもの等がある。

- ・堀畑正臣（二〇〇一）『「明月記」に見える「記録語」（その一）——齋木一馬氏の「記録語例解」との比較——』『明月記研究 記録と文学』第六号（堀畑）二〇〇三。『院政・鎌倉期古記録に於ける記録語・記録語法の研究』科研費報告書に再録。
- ・——（二〇〇三）『「明月記」の記録語（その二）——齋木一馬氏の「記録語の例解」 国語辞典未採録の用字・用語』との比較——』『院政・鎌倉期古記録に於ける記録語・記録語法の研究』科研費報告書（『明月記研究 記録と文学』第八号に再録）

堀畑(二〇〇一)には、斎木の論考の問題点として、「当該文献の挙例がないからその文献には用例がないとは云えないこと」「記録語は時代と共に意味変化するが、…(中略)…挙例がどの意味で使用されたか今一つ明らかでないこと」「当該文献でその語の使用状況がよく分からないこと」が挙げられており、斎木の「例解」と比較することによって、「記録語の意味変化の動向・傾向が見えてくるであろう」とする。

また、「斎木氏の提言・批判の足跡をたどりながら、代表的な国語辞典における記録語の扱いの変遷を検討」したものとして、左のものがある。

- ・ 中山緑朗(二〇〇六)「大型国語辞典・古語辞典における記録語の扱い——斎木一馬氏の提言をめぐって——」
- 倉島節尚編『日本語辞書学の構築』おうふう(中山(二〇一六))『日本語史の探訪——記録語・古辞書・文法・文体——』おうふう 所収)

この論文では、『言海』『大言海』『大日本国語辞典』『大辞典』『日本国語大辞典(初版)』『日本国語大辞典(第二版)』角川古語大辞典』『時代別国語大辞典 室町時代編』『古文書古

記録語辞典』『吾妻鏡用語注解』における記録語の採録状況が調査・整理され、各辞典の採録状況と特徴とが指摘されている。記録語や古文書語に属する多くの語が『日本国語大辞典(初版・第二版)』に採録されていること、その一方で、平安古記録では常用語である語が、多くの大型国語辞典で見逃され採録されていないという傾向も存すること等の指摘がある。

以上、ここでは、斎木の論考に端を発する記録語研究(および辞書研究)について見てみた。『日本国語大辞典』より前の辞典には記録語はあまり採録されていなかったこと、斎木の論考は日本語学分野における記録語研究にも多くの影響を与えたこと、記録語の意味変化や文献ごとの使用状況を考えたばあい記録語の研究にはその余地が多く残されていること、国語辞典(含古語辞典)における記録語の扱いには現在でもまだ不備な点があること等が確認できたことと思う。今後の記録語に関する研究の進展状況によっては、国語辞書の書き換えが迫られることもあるものと思われる。また、記録語辞典・用語集の向上が、一般の国語辞典の向上に寄与する

こともあるだろう。

三 『平安時代記録語集成』の価値・可能性

(一) 『平安時代記録語集成』について

さて、これまでの記録語辞典・記録用語集は、日本語学的観点からみた場合、用例の欠如や語の読みの検討が不十分であることなどから、十分には活用しがたいものが多かったといえる。また、現行の大型の国語辞典や古語辞典においては、記録語の採録や扱い方にまだ不備が残っている。こうした状況の下、日本語研究にも極めて有用と思われる書が刊行された。

本節で取り上げるのは次の書である。

・峰岸明(二〇一六)『平安時代記録語集成 上・下 附 記録語解義』吉川弘文館

この書の内部は、平安時代の記録語約三万語について所出箇所(記録名・年月日・刊本頁行)・用例を示した「データ集『平安時代記録語集成』(二六〇〇頁)と、記録語辞典部分の

「記録語解義」(四九四頁)とからなる。

本書は、もともとは『平安時代記録語辞典』として企画されたもので、吉川弘文館の公式サイト内に二〇〇六年に置かれた「吉川弘文館創業一五〇周年記念出版(記念出版一覧)」のページには、記念出版七タイトルのうちのひとつとして掲げられていた。その際の内容説明には「本書は御堂闌白記・小右記等平安時代の主要な記録に使用された歴大な語句を蒐集し、意義の解説を加え、さらに従来あいまいにされてきた、語句の読みを確定した画期的な辞典」とあった。³⁾

本書の刊行の経緯については、吉川弘文館編集部による「本書刊行の経緯」(『平安時代記録語集成 下』二六〇一～二六〇三頁)に詳しいが、創業一五〇周年記念出版に予定された段階では、一五〇〇語規模の辞典が計画されていたとのことである。その後、峰岸博士の御入院、御逝去により、博士の遺された原稿・データをもとに、編集部と校閲者の加藤友康氏等により作業は進められ、本来は本体であった辞典と附録であったデータ集との関係が逆転し、本書の刊行に至る。

しかし、「記録語辞典部分」「記録語解義」は見るからに未完

成で、もしこれが完成していたらと惜しまれる。「記録語解義凡例」には次のようにある。

著者は記録語辞典の御原稿を書きかけられ、一部はほぼ完成していたが、検討の時間を持たれぬまま逝去された。

このため御原稿には明らかに未完成の箇所が見つけられる。しかし、この御原稿は『色葉字類抄研究並びに索引 本文・索引編（昭和三十九年六月）の「あとがき」で作成の抱負を明らかにされた「記録語辞典」の構想の一端を示すものと思われるので、未完成の部分も含めて遺された御原稿に整理を加え、「記録語解義」として『平安時代記録語集成』に附載することとした。なお、

「記録語解義」の題は、著者の御提案になる。

完全な項目の場合、見出しの下に、読み、品詞等、語義、用例、読みの証拠が示されており、日本語研究者の使用にも十分堪える、これまでにない画期的なものであるだけに、未完成で終ったことが本当に惜しまれる。

記録語のデータ集「平安時代記録語集成」は、『平安時代記録語辞典』編纂のために蒐集された記録語のデータを整理し「たもの。ここでいう「記録語」は、「記録（日記）に使

用された語全般」のことであり、いわゆる記録特有語には限定されない。用例蒐集の対象とされたのは、『貞信公記』、『九曆』、『小右記』、『御堂関白記』、『権記』、『左経記』、『春記』、『帥記』、『水左記』、『後一条師通記』、『兵範記』で、これらの記録類から蒐集された語句が漢和辞典の方式で掲出される。各項目は、親字（第一字）の見出し、項目（語句）の見出し、用例所出箇所、引用文からなるが、項目には品詞等が、用例所出箇所には記録名、所出年月日、刊本の種類、刊本における巻次・頁・段・行が示されている。「凡例」の21には次のようである。

著者は、辞書の編纂には用例の蒐集が基礎となる、とお考えから十年以上の歳月をかけ本書に収められた用例を独力で蒐集された。これらの膨大な用例を通覧することにより、読者みずから語義を考え、既刊の辞書類の記載から洩れた語を見だし、これまで説かれてきた語義に修正を加え、語の使用例の年代を遡らせることができるであろう。

このデータ集の利用法の一端、そして価値が端的に示されている。記録の用語集としては、用例の所出箇所が明示されて

いるのは貴重で、容易に刊本で確認することができる。

これ以上の凡例に付け加えることも特段ないようにも思われるが、本書（『平安時代記録語集成』、『平安時代記録語解義』）を瞥見して私なりに気づいたことを次に記しておきたい。

（二）『平安時代記録語集成』の価値

（イ）合成語（派生語・複合語）の使用状況の把握

まず、はじめに、これから述べることは、日本語研究の観点からのものであり、日本史研究の立場等からは異なった見方もあるであろうことをお断りしておきたい。

さて、先にも触れた吉川弘文館編集部による「本書刊行の経緯」であるが、そこには『記録語集成』という書名について峰岸博士が「また採取の対象になっていない平安時代の記録もあるが、大体の記録語は採取されているのではないかと思つ、とし『記録語集成』でもよいのではないか、というお考えを示された」ことが記されている。記録語研究の泰斗であった峰岸博士がこうしたお考えを示されたことは重要で、

「凡例」5には以下のようにあるものの、『古典対照語い表』や『訓点語彙集成』等に近い利用法が可能ないように思われる。

5 辞典の編纂という目的から、全ての語が、全ての所出箇所について網羅的に蒐集されているわけではない。このことから、以下の点に留意されたい。

- (1) 各記録には蒐集から洩れた語がありうる。
- (2) ある記録での用例が掲出されていないことは、必ずしも当該語のその記録における用例が皆無であることを示さない。

(3) ある記録について、最初に掲出された用例が当該記録での初見とは限らない。

最終的には東京大学史料編纂所の「古記録フルテキストデータベース」等による確認をする等の慎重な配慮が必要かとは思われるものの、ある語が記録類で使用されているか否か、またどういった記録で使用されているかといったことについて、おおよその見当をつけるために使用することができるように思われるのである。これは、『記録語集成』が単字ではなく語を採録対象としているために可能になることである。語を対象とするのは、『本書刊行の経緯』にもあるように

「漢字索引として、現在、単字単位の検索に資する一字索引が世に広く行なわれているが、用語検索のための語彙索引としてはあまり有用ではないように思う⁴。」という峰岸博士のお考えによる。

記録においてどういふ語が使用されているのかを、「記録語集成」で把握できるという実例をいくつか示そう。

たとえば記録類で多用される接頭語として「相(アヒ)」⁵があるが、これがどのような動詞に前接しているかを調べたいとする。編纂所のデータベースの場合、単字「相」で検索をかけ、ヒットしたもののの中から、「宰相」「丞相」「相撲」「相模」等のいわゆる検索ノイズを除去する作業が必要になる。ところが、「記録語集成」では、親字「相」の項目を見ると、その下の項目(語)として「接頭語「相」+動詞」が多く立てられており、すぐに状況を把握することができるのである。品詞等の注記で「動」動詞ノコト——引用者注 とあるもののみ抜き出してみる。なお、抜き出しに当たっては漢字の旧字体は新字体に改めた(以下同じ)。

「相押」「相移」「相遊」「相擲」「相允」「相引」「相引参

「相引来」「相映」「相謁」「相加」「相賀」「相改」「相礙」「相交」「相好」「相隔」「相合」「相含」「相奇」「相寄」「相記」「相疑」「相議」「相咎」「相救」「相求」「相向」「相仰」「相去」「相御」「相禦」「相語」「相具」「相遇」「相和」「相過」「相会」「相会合」「相跪」「相携」「相穴なふ」「相勤」「相願」「相競」「相競渡」「相計」「相驚」「相迎」「相結」「相叶」「相挾」「相兼」「相見」「相誤」「相構」「相構出」「相刻」「相剋」「相告」「相恨」「相混」「相混置」「相沙汰」「相催」「相載」「相諍」「相双」「相雜」「相参」「相撰」「相似」「相思」「相次」「相示」「相試」「相守」「相失」「相集」「相侵」「相尋」「相任」「相謝」「相障」「相讓」「相取」「相聚」「相准」「相乘」「相從」「相承」「相仍」「相屬」「相統」「相觸」「相飾」「相親」「相進」「相進見」「相進立」「相省略」「相咲」「相招」「相消」「相借」「相戰」「相遷」「相助」「相送」「相塞」「相代」「相對」「相待」「相退」「相到」「相当」「相達」「相答」「相談」「相談話」「相憚」「相知」「相馳」「相馳向」「相著・相着」「相佇立」「相儲」「相重」「相定」「相替」「相遞」「相弔」「相挑」「相敵」「相伝」「相伝奏」

「相渡」「相通」「相鬪」「相背」「相妨」「相訪」「相迫」
 「相發明」「相犯」「相伴」「相半」「相番」「相備」「相比」
 「相畢」「相憑」「相扶」「相輔」「相副」「相副遣」「相分」
 「相分立」「相問」「相并」「相並」「相別」「相逢」「相約」
 「相与」「相応」「相用意」「相頼」「相勞」「相率」「相立」
 「相臨」「相量」「相励」「相了」「相列」「相連」「相連行」
 「相連居」「相連立」「相瞬」「相籠」「相論」「相違」。

おおよそこれだけの異なり語があることが短時間で把握できるのである。また、動詞以外に、副詞に前接した例として「相共」「相俱」「相互」、形容詞に前接した例として「相近」があることなども、すぐに把握できる。調査の見通しを得るためには、非常に強力なツールになることは間違いない。ただし、記録本文の解説によっては品詞認定が異なり得ることには配慮が必要であろう。また、「記録語集成」には、「凡例」にもあるように、やや不統一な点があることにも注意が必要である。「動」ではなく「句」と品詞等の注記が付けられたものの中にも「相加差」「相加奏」「相加送」「相加付」等のように動詞と見られるものがあり、また、品詞等の注記が付けられていないものの中にも「相誠」「相教」「相企」「相忌

等のように動詞と見られるものがある。さらに、「親字」「相」の直下にも、「(一)「名」名詞ノコト。用例省略 (二)「動」動詞ノコト。用例省略 (三)「接頭」接頭語ノコト。用例省略 (四)…」以下省略…」と単字としての用法の説明があり、(一)「接頭」の項の用例には、「相争」「相示」「相迎」等、「相」を造語成分としてもつ派生語(動詞)の用例に相当するものが示されていることにも注意を必要がある。

それにしても、これだけのツールは今までになかったものであり、本書の価値を大きく損ずるものではない。読みの確定が必要ではあるが、右に抜き出した「相+動詞」の形の語について、『日本国語大辞典 第二版』『古語大鑑』⁶⁾を見てみると、たとえば抜き出したうちのはじめの三語「相押(あひおす)」「相移(あひうつる)」「相遊(あひあそぶ)」など、これらの辞書には採録されていないものが多いのである。古記録における使用語彙の実態を知る上で、非常に貴重な資料であるといえよう。

ところで、「記録語集成」が古記録の言語の実態を知る上で貴重な資料となっているのは、この資料における「記録

語」の定義が関係している。日本史関係者の手になる記録語辞典・用語集の場合、記録類に見られる「変わった(難解な)熟語・字句」等といったものが採録対象とされることが多いようである。「変わった」「特殊な」「難解な」といった基準で採録する場合、「相+動詞」のような、意味を推測するところがさほど困難でないものは、あまり採録されない傾向にあるのではないか。しかし、「記録語集成」の場合は、その「凡例」の3に「本書の収録する「記録語」とは、記録(日記)に使用された語全般をさしている」とあり、広い意味での記録語(記録の語彙)を採録しているのである。このことは、言語研究の上では、大きな強みになる。「相」以外にもいくつか例を挙げよう。

「事(こと)」「を造語成分とする語には、「事疑(こと)のうたがひ」「事旨(こと)のむね」等、記録語独自のものが多いとの指摘がある。「事」という語は、これまでの記録語辞典・記録用語集ではほとんど採られていないようである。では、「事疑」「事旨」以外にどのようなものがあるのだろうか。これなども「記録語集成」を見れば、ある程度情報を得ることができる。「集成」に示されているものを次に

掲げる(*を付したものは、「記録語解義」で取り上げられているものを示す。以下同じ)。

「事意」「事由*」「事隠*」「事縁」「事感」「事危」「事忌」「事儀*」「事咎」「事恐」「事興」「事勤」「事勲」「事外」「事闕」「事慶」「事業*」「事驗」「事故*」「事誤*」「事恨」「事之案内」「事之由」「事之由緒」「事之感心」「事之気色*」「事之最初」「事之子細*」「事之旨」「事之次第*」「事之実正」「事之儲」「事之非常」「事之理」「事之礼節」「事之委趣」「事*」「事次*」「事次第*」「事始*」「事旨」「事実*」「事実正」「事賞」「事障」「事趣*」「事崇」「事愁」「事情*」「事憚」「事難*」「事儲」「事定」「事体*」「事妨」「事謗」「事発」「事煩*」「事費」「事謬」「事不審」「事問」「事聞*」「事便*」「事便宜」「事理」「事畏」。

こうした語のあることが、すぐに分かるのである(なお、「解義」で取り上げられているものは、用例と読みに関する証拠が示されているものの、いずれも未完成の項目である)。やはり記録(日記)の語彙を考える上で大きな力になるといえよう。

また、複合動詞には記録（語）に特徴的なものがあることが従来指摘されており、「罷（まかり）」を造語成分とする複合動詞、罷帰（まかりかへる） 罷下（まかりくだる） 罷申（まかりまうす） などは、仮名文学作品にも見える語であるが、古記録にも広く使用されているのであって、記録語という観点から改めて見直す必要があるように思われる⁽⁸⁾等の発言がある。従来の国語辞典の場合、「まかり」という語について見てみると、立項されている語は多くはなく、用例も仮名文学作品から引かれていることが多い。しかし、「記録語集成」を見ると、以下のような「罷」の形の語が古記録で使用されていることが分かる。

「罷下」「罷行」「罷合」「罷寄」「罷騎」「罷給」「罷向」
 「罷去」「罷遇」「罷過」「罷会」「罷廻」「罷還」「罷帰」
 「罷叶」「罷見」「罷遣」「罷候」「罷入」「罷上」「罷出」
 「罷乘」「罷申*」「罷成」「罷遣」「罷返」「罷到」「罷当」
 「罷逃」「罷著・罷着」「罷度」「罷渡」「罷登」「罷通」
 「罷付」「罷返」「罷逢」「罷離」「罷留」「罷立」「罷籠」
 「罷違」。

以上は「動」との注記が付けられているものであるが、他に

この注記がないもので、「罷倚」「罷巡」「罷昇」「罷隨」「罷発」もある。

これまで見てきたことから分かるように、「記録語集成」は、記録資料における合成語（派生語・複合語）の使用状況を把握する際には、非常に有効なツールとなる（ここでは、もっぱら和語の例を挙げたが、これは漢語の構成要素（漢字語基・軸字）について考える場合にも当てはまる）。ただし、漢和辞典方式による配列のため、語の二字目・三字目からの検索（逆引き）はできないため、接尾語を問題にしたい場合や複合語の後項を問題にしたい場合等には使えないのは残念である⁽⁹⁾。

なお、「一」「二」「三」等の漢数字を含む語が多く採られているのも本書の特徴の一つかと思われる。「一」の形式のものの場合、「記録語解義」で「ほぼ辞典の項目の体裁を備えている項目」（「記録語解義凡例」に相当し、「一つの。」「一つ。」と語義が示されているものが多いが、古記録における助数詞について詳しく示したいという峰岸博士の意図があったものかも推測される⁽¹⁰⁾。「一」の形式で「記録語集成」に採録されているものを全て掲げておく。

「一*」「一移」「一衣*」「一*」「一揖*」「一邑*」
 「二音*」「一宇*」「一曜」「一腰*」「一葉*」「一筵*」
 「二今日*」「一加階」「一家*」「一歌*」「一河処*」
 「二箇条*」「一箇年」「一荷*」「一牙*」「一界*」「一
 蓋」「一階*」「一行*」「一行書*」「一客*」「一匣*」
 「二合*」「一夾*」「一函*」「一間*」「一基*」「一奇
 一驚*」「一季*」「一揆*」「一騎*」「一義*」「一宮
 」「一牛」「一級*」「一伽藍」「一向*」「一郷*」
 「二脚*」「一筥*」「一御子*」「一曲*」「一斤染」「一
 筋*」「一具*」「一懼一喜*」「一軀*」「一裏*」「一
 廻*」「一皇子*」「一丸*」「一官*」「一管*」「一貫
 」「一櫃」「一筐*」「一月*」「一卷*」「一懸*」
 「二郡*」「一結*」「一獻*」「一見*」「一言*」「一壺
 」「一戸」「一鼓*」「一公主*」「一口*」「一刻*」
 「二剋*」「一國*」「一斛*」「一座*」「一再*」「二双
 」「一艘」「一昨*」「一昨日*」「一昨夕*」「一昨
 年*」「一昨夜*」「一匠*」「一山」「一蓋*」「一算樂
 (一弄樂力)」「一事*」「一事以上」「一使*」「一史*」
 「二字*」「二字金輪」「一字金輪供」「一支*」「一時*」

「二枝*」「一矢*」「一紙*」「二*」「二个月*」
 「二歌*」「二更*」「二間*」「二獻*」「二
 剋*」「二座*」「二艘*」「二三巡*」「二三番
 」「二時」「二枝*」「二手*」「二巡*」
 「二人*」「二段*」「二町*」「二度*」「二
 倍*」「二步*」「二粒*」「一周忌*」「一手*」
 「一首*」「二箇日*」「二七日*」「二室*」「二日*」
 「二日一時」「一日講*」「二日経」「二襲*」「二寢*」
 「二心*」「二任*」「二社*」「二車*」「二上*」「二上
 臆*」「二想*」「一箱*」「一觴*」「一宿*」「一巡*」
 「二瞬」「一処*」「一乘*」「一升*」「一種*」「一種物
 」「一束」「一職*」「一足*」「一親王*」「一身*」
 「二人*」「二世源氏*」「一声*」「一生*」「一省*」
 「二祭*」「二尺*」「二石*」「二積」「一切*」「一切経
 」「一切経会」「一切経所*」「一切経論*」「一切衆
 生*」「一折櫃*」「一折敷*」「一節*」「一節祿*」
 「二絶*」「一説*」「一前*」「二千*」「一卷*」「一
 千段*」「一千部*」「一善*」「一船*」「一錢*」「一
 所*」「一僧*」「一族*」「一寸*」「一尊*」「一駄*」

「二代*」「二代一度*」「大納言*」「大門*」「対*」「一袋*」「内親王*」「一堂*」「一幘*」「一道*」「道使*」「一宅*」「一搦手半*」「一諾*」「一談*」「一男*」「一壇*」「一旦*」「一段*」「二端*」「一昼夜*」「一軸*」「一帙*」「一文*」「一張*」「一杖*」「一長者*」「一女*」「一重*」「一塵*」「一体*」「一定*」「一定額*」「一帝*」「一廷*」「一挺*」「一町*」「一朝*」「一条*」「一鳥居*」「一滴*」「一的*」「一帖*」「一点*」「一念珠*」「一天*」「一年*」「一年半*」「一度*」「一同*」「一斗*」「一桶*」「一灯*」「一等*」「一通*」「一頭*」「一屯*」「一倍*」「一坏*」「一拜*」「一盃*」「一枚*」「一房*」「一方*」「一方行香*」「一棚*」「一百部*」「一八*」「一鉢*」「一番*」「一盤*」「二万*」「二万卷*」「二万束*」「二万體*」「二万灯*」「二万遍*」「二万部*」「一匹*」「一疋*」「一品*」「一品宮*」「一品経*」「一品親王*」「一品王子*」「一民*」「一府*」「一儷*」「一舞*」「一舞人*」「一幅*」「一腹*」「一物*」「一分*」「一分召*」「一分宣言*」「一問*」「一文*」「一

柄*」「一瓶*」「一遍*」「一面*」「一部*」「一鋪*」「一保*」「一封*」「一捧*」「一本*」「一本菊」「一本御書所*」「一門*」「一命*」「一夜*」「一夜漏*」「一勞*」「一臈*」「一覽*」「一理*」「一流*」「一粒*」「一林*」「一両*」「一両曲*」「一両廻*」「一両月*」「一両献*」「一両国*」「一両事*」「一両日*」「一両觴*」「一両樹*」「一両巡*」「一両処*」「一両人*」「一両声*」「一両説*」「一両所*」「一両體*」「一両年*」「一両度*」「一両盃*」「一両歩*」「一両夜*」「一類*」「一零*」「一領*」「一寮*」「一料*」「一列*」「一聯*」「一連*」「一弄楽*」「一鹿毛*」「一往*」「一位*」「一位階*」「一員*」「一院*」「一屋*」。

これらについて、「記録語解義」では、たとえば【一牙】
 ひとときは・(イチゲ) 鷹狩りで使う犬、一匹。…(以下、用

例・読みの証例省略) …【一筐】(ひとかたみ) 方形の竹籠、一つ。…(以下、用例・読みの証例省略) …等と語義が示されている。これだけ丹念に数に関する語を採集・採録した辞典・用語集はあまりないのではないか。本書が、峰岸博士の記録

語研究ならびに記録語についての展望と密接に繋がることを示すものである。

(口) 平安時代の貴族の日常使用語彙の資料として

日本史関係の用語については、ここまであまり触れてこなかったが、「記録語解義」は、その凡例に「加藤友康教授が選定された約一四〇〇項目（主に日本史関連の語）…ほぼ辞典の項目の体裁を備える」とある。記録で使用される語彙の中でも、特にこの方面の用語は、かなり充実しているといえる。ただし、「記録語解義」は基本的には未完成のものであり、二で取り上げた斎木の指摘したいわゆる「記録語」等については及んでいない部分がある。これについては、利用者各々が「記録語集成」所載の用例から考えるしかない。

「記録語集成」はこうした用例についても、当然ながらもよく採集している。先にみた中山(二〇〇六)では、「衝黒」の語について、「平安古記録では常用の語である。」日本国

語大辞典 第一版 ヲ指ス で辛うじて採録されているが、用例が不足である」とする。(1) この語について、『日本国語大辞

77 典 第二版』を見ると、「夜の闇 夜」との意味を示すが、

用例は本邦のものとしては『本朝無題詩』から一例が、中国のものとしては白居易の例が一例示されているのみである。

一方、「記録語集成」を見ると、きちんと採録されており、

『小右記』『左経記』『水左記』『兵範記』に例が見られることが分かる。「記録語集成」は、平安古記録では常用の語でありながら、一般の国語辞典では見過ごされてきた語を知る上で貴重な資料になる。

さらに、一見したところでは、「特殊な」「風変わりな」「難解な」といった印象を受けない語の中からも、平安時代の貴族社会における使用語彙の実態を知る上で、貴重な例を拾うことができる。これは先にも述べたように、単字ではなく、語の形で用例を採録することにより、確認作業が容易になっているものである。恐らく詳細に見ていけば相当数の例があるものと思われるが、ここでは名詞の例を二つ挙げておく。先に見た複合動詞の例等も含めて、表現内容に左右される部分があるものではあるが、平安時代の語彙の実情という点では、貴重である。

「記録語集成」によれば、「筆笠」という語が『後二条師通記』の寛治七年正月五日の条にある。前の文脈を補って大日

本古記録から引用すると、左の通りである。

・深蓋手管入叙位次第等、

召参議、

筆笠八事訪問、笠ハ如本ニヤ候ガ、不審也、

この語は史料編纂所の古記録フルテキストデータベースでもこれ以外に例を見ないものである。『日本国語大辞典 第二版』では立項はされているものの、「ふでかさ【筆笠】一名筆の先端にかぶせて、筆先を保護する竹製の筒。筆の鞘（さや）。」と意味のみ記述し、用例は掲げていない。『師通記』

の例は江戸期の新写本（予楽院本）によるため、確実に平安期に遡るものとは言えないが、それでもこの語（漢字表記）の古い例であることは確かだろう。「記録語集成」や史料編纂所のデータベースからは、平安古記録の用例は見出しがたいが、語誌的には、類義の「筆鞘・筆筒（ふでのさや）」「筆鞘笠（ふでのさやがさ）」等との関係も問題となる。たとえば『色葉字類抄』には

筆筒フテノサヤ（黒川本 中一〇四オ一・フ雑物）

とある。語形（よみ）の確定を含めて、考えるべきことは多い。

また、「記録語集成」を見ると、「筆管」という語が『兵範記』仁平二年三月六日の条にあることが分かる。前後を補って増補史料大成から引用する。

・居時絵螺鈿御硯一合、懸子居硯筆毫等、筆管墨硯小刀柄等、用紫

檀、懸子下入薄様檀紙等尚三帖、

国立歴史民俗博物館の記録類全文データベースでは、当該箇所は「筆管」とするが、文意から考えて、この校訂は疑問である。同データベースによれば、『兵範記』には、他に仁安四年二月七日条に「筆管」の用例がある。また、他の古記録からも「筆管」の例を拾うことができる。ところが、『日本国語大辞典 第二版』では「ひっかん【筆管】」については、語義を「筆の軸。筆柄（ふでづか）。」とし、用例は中国の『西京雜記』の例を挙げるのみで、本邦の例については「補注」で「名物六帖 器材箋」には「筆管 フテノチク」とある。」と言及するのみである。平安古記録の「筆管」の例は、本邦における初出例として『名物六帖』からかなり遡ることになる。語形（よみ）の確定がまずは問題であるが、語誌的には、類義の「筆柄（ふでづか・ふでのつか）」「筆軸（ふでちく・ふでのちく）」等との関係も問題となる（史料

編纂所の古記録データベースによれば、鎌倉期の『民経記』に「筆柄」の用例が見られるようである。「仁治三年正月五日条」が、「筆柄」「筆軸」のいずれも平安古記録の用例は見られない。

今、二語の例のみを示したが、こうした例は枚挙に遑がないものと思われる。「記録語集」の平安時代の語彙資料——日常使用語彙の実態を探る資料——としての価値は極めて大きい。

四 おわりに

以上、本稿では、これまでの記録語辞典・用語集の概略を辿り、あわせて『平安時代記録語集』の価値・可能性のうちいくつかについて指摘した。日本語研究のツールとして見た場合、『平安時代記録語集』は、これまでの辞典・用語集とは比べものにならないほど利用価値が高いものであると考えられる。これは、単字ではなく語で用例を示したこと、記録で使用される語全般を採録対象としたことによる。記録資料は、漢字表記を主体とすることから、使用するにあつ

ては、ややもするとハードルが高いもののように感じられる場合が多いものである。本書は、そのハードルを幾分かでも低くする役割を果たすものとなるう。

本稿の指摘は、筆者が本書を瞥見して気づいたことを示したに過ぎない。他にも本書の価値・可能性は大いにあるものと思う。本書の刊行は、峰岸博士の開拓された記録語研究の分野がさらに発展・深化する契機となることであるう。

[注]

(1) 「記録語と国語辞典」で掲げる斎木一馬(一九七九)等参照。

(2) なお、斎木よりも早い時期のものに、布施秀治(一九四三)「古文書記録に見えたる語辞の一般考察(上)(下)」(帝国学士院紀事)第二巻第一号・第二号があり、布施はその「結語」で「之の研究の成果を含むことによつて、始めて完全に近い辞典が出来て、世人を満足せしむるのみならず、やゝもすれば辞典の編纂を軽視して、単なる器械的努力の結果であるとか、又は市井の営利的な事業に過ぎないとかいふやうな、世の誤つた観念を改めて、将来の此の種研究者の抱負を高め、且つ眇たる一個の犠牲において、国家的事業の一端を代行することが出来るとしたならば、假令、陳勝呉広の轍を踐むと

も敢へて辞すべきではないと思ひ直して、兎も角も研究を継続して来たのである」と述べており、布施も、古文書語・古記録語辞典の編纂、延いては国語辞典の充実を考えていたものと思われる。事実、「一 はじめに」で挙げたように、これより早く一九三二年に『古文書記録辞典 ア部』を作成している。

- (3) 当時、体裁・価格等については、以下のように示してあった。「菊判・上製・函入・七五〇頁予定 予価一六八〇円 (二〇) 一〇年九月刊行予定」。

- (4) 峰岸明 (一九九五) 『陽明文庫本御堂閑白記自筆本総索引』汲古書院の「あとがき」による。なお、これ以前の峰岸明・横浜国大東鑑之会 (一九七九) 『寛永三年版吾妻鑑巻第二漢字索引』笠間書院も親字の下に語句がまとめられた漢和辞典方式の体裁をとっている。

- (5) 峰岸明 (一九七七) 「記録体」『岩波講座日本語10 文体』岩波書店(峰岸(一九八六)『平安時代古記録の国語学的研究』東京大学出版会 所収)の「四 語彙」4 記録特有語の存在(1)には、「接頭語「相(あひ)」「を造語成分とする動詞には、漢文訓読語と共通するものも多いが、中に、相叶(あひかなふ) 相訪(あひたづぬ) 相次(あひつぐ) 相伴(あひともなふ) 相禦(あひふせぐ) 相交(あひまじはる) 相待(あひまつ) 相催(あひもよほす) など古記録で主に使用される語も存する」とある。

- (6) 峰岸博士も編集委員の一人であった。なお、本書の「総合

凡例」の「編集方針について」の四(4)には、「平安時代の古記録・古文書などに見られる国語の言語的性格については、尚、不明の点が多く残されており、従来の辞書では、特にその漢字・漢語の読み方について、国語学的な面からの基礎的な配慮が十分でなかったが、本辞典では、厳密な方法を踏まえた上で、その読み方を決定し、新たに多数の用例を挙げ、その語釈を記述した。尚、この種の語彙は、従来の古語辞典には、極めて乏しいので、日本史関係の史料、並びにその索引類を極力活用して採録し、本辞典の特色の一とした」とある。

- (7) 注5の文献に同じ。

- (8) 松下貞三(一九五一)「記録体の性格——吾妻鏡を中心として——」『国語国文』第二〇巻第九号(松下(一九八七)『漢語受容史の研究』和泉書院 所収)や注5の文献等。「罷」については、注5の文献による。

- (9) 「本書刊行の経緯」に「この種の資料としては、2字目・3字目・…についての索引を要するところであるが、紙幅の関係から今回は割愛せざるをえなかった」とある。ちなみに、注4に掲げた峰岸博士の手になる『御堂閑白記』や『吾妻鏡』の索引では、二字目以降の要素についても、「参照項目」指示による配慮がなされている。

- (10) 峰岸博士には、峰岸(一九六六・一九六七)「平安時代の助数詞に関する一考察」(二)『東洋大学紀要文学部篇』第二〇号・第二一〇号(峰岸(一九八六)所収)がある。

- (11) この語が古記録で使用される語であることについては、以下のものにも言及がある。中山緑朗(一九八二)「記録体の語彙——『小右記』の朝・夕方・夜の語彙——」『学苑』第四九三号(中山(一九九五))『平安・鎌倉時代の語彙』東宛社所収)、峰岸明(一九八二)「記録の語彙」『講座日本語の語彙』³ 古代の語彙 明治書院(峰岸(一九八六)所収)、清水教子(一九八八)「権記」に見られる「時」^上の表現——1日(24時間)を中心として——」『中国短期大学紀要』第一九号(清水(一九九三))『平安中期記録語の研究』翰林書房・同(二〇〇五)『平安後期公卿日記の日本語学的研究』翰林書房所収)等。
- (12) 『日本国語大辞典 第二版』では「ふで【筆】」の項の子見出しに「ふでの≡鞆(さや)」「≡笠(かさ)・≡鞆笠(さや)がさ」「を立てるが、次に引く『色葉字類抄』の例以外は、雑俳や狂歌など江戸期の例しか挙げられていない。
- (13) 『日本国語大辞典 第二版』では「ふで【筆】」の項の子見出しに「ふでの柄(つか)」「を立てるが、用例は江戸期のもの(『訓蒙図彙』『書言字考節用集』)しか挙げられていない。また、「ふでじく【筆軸】」の項も挙げられている例は江戸期のもの(『玉露叢』)である。

(文学部教授)